

# JSGS-Net と 「若手研究者と育児ワーキンググループ」

お茶の水女子大学大学院博士後期課程、日本学術振興会特別研究員 (COE)

倉田 容子

このたび、若手研究者ジェンダー・スタディーズ・ネットワーク (Junior Scholars' Gender Studies Network、以下 JSGS-Net) 内にて 2007 年度に発足した「若手研究者と育児ワーキンググループ」の活動報告および研究成果がまとめられ、初めてその成果が公開される運びとなった。以下に、JSGS-Net のあゆみと「若手研究者と育児ワーキンググループ」設立の経緯について述べる。

JSGS-Net は、若手研究者の意見・知識交換および継続的な学際的交流の場の提供を目的としたネットワークである。若手研究者からの企画・立案により、2006 年 4 月にお茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア」(以下、F-GENS) 内にて発足した。事業推進者である戒能民江先生・菅聡子先生にご指導いただきながら、学内の若手研究者有志による JSGS-Net 運営委員会が企画運営を行ない、JSGS-Net 専属 COE 研究員の松尾江津子と筆者の二名により運営業務を行っている。

JSGS-Net 発足以前に、F-GENS の若手研究者による研究活動がまとまった成果を見せたのは 2004 年 11 月に開催された第 1 回 F-GENS シンポジウムにおける若手研究者ポスター・セッションが最初である。このポスター・セッションは、若手研究者支援の一環であると同時に、プロジェクトの枠を超えた研究報告を一堂に会することで F-GENS の全体像を提示する機会ともなり、学内外の来場者に好評を博した。翌年 11 月の第 2 回 F-GENS シンポジウムでは、間プロジェクトという前年度の方向性は引き継ぎつつも、企画・運営のすべてを若手研究者自身が担う形で若手研究者企画セッション「アジアから発信するジェンダー研究の現在 (いま)——若手研究者の視点から」が実現した。

これらの活動を通して、学際的な対話がジェンダー研究の質的深化において不可欠であること、しかしまたその実践には多くの時間と労力が必要とされることが改めて浮き彫りとなり、JSGS-Net 発足に至った次第である。2006 年度は、メーリングリストや定期的な JSGS-Net 研究会の開催により、若手研究者ネットワークの構築と継続的な学際的対話を実現した。その結果、第 3 回 F-GENS シンポジウム内・若手研究者企画セッション「〈身体〉のポリティクス——複合領域としてのジェンダー／セクシュアリティ研究の試み」では、社会科学および人文科学のより広範な専門領域からの報告者を得、司会も若手が担うなど、より充実した成果を発信することができた。

2007年度は、このような一連の研究活動を総括するとともに、F-GENS 終了後の若手研究者の研究環境整備に貢献すべく、昨年度から行なってきたメーリングリストによる若手研究者ネットワークの構築、第4回 F-GENS シンポジウム内・若手研究者企画セッション「近代・女性・装置——イマジネーションの彼方へ」の開催に加え、『F-GENS ジャーナル（若手研究者特集号）』の刊行を実現した。さらに本年度は、F-GENS シンポジウムにおいて実施された託児サービスを契機として、「若手研究者と育児ワーキンググループ」を JSGS-Net 内部にて発足した。

本ワーキンググループの活動を中心的に進めてきたのは、2007年度若手研究者企画セッションの企画・運営に関わった若手研究者たちである。若手研究者企画セッションの準備を進めるかたわら、F-GENS シンポジウムにおける託児サービスの導入に満足するのではなく、その成果を引き継ぎ、今後の若手研究者に対する育児支援の礎とするにはどのような活動が必要か、ワーキンググループの方向性や課題について繰り返し議論を交わした。出産や育児をめぐる多様な立場に置かれた参加者たちがコンセンサスを形成することは容易ではなかったが、率直に対話を重ねるうちに参加者相互の理解が深まり、また結果的に、そうした対話の積み重ねが従来の育児支援をめぐる議論においては欠落しがちであった多様性への配慮と批評的な視点を導入する契機ともなった。

本ワーキンググループ最大の特色は、若手研究者の育児支援に関する実態的な情報を収集し、提言を発信するだけでなく、ジェンダー／セクシュアリティ研究の視座から育児をめぐる「当事者性」それ自体を問い直すという姿勢にある。それは単に研究におけるアプローチ方法だけの問題ではなく、ワーキンググループの参加者全員が育児をジェンダー構造の根源的な問題系の一つとして認識し、育児をめぐるトピックや慣用的な表現が暗黙裡に孕むジェンダー規範やヘテロセクシズムを常に注意深く監視することを意味する。繰り返すならば、このような姿勢は、必ずしもワーキンググループ発足当初から共有されていたものではなく、現実には育児の非当事者である参加者が半数以上を占める本ワーキンググループの性格と、参加者同士の真摯な対話が生み出した成果の一つである。これまで私的領域に囲い込まれ、アンペイドワークであった育児を社会化し、可視化すること。同時に、育児をめぐる困難性としばしば女性同士の絆を阻んできたものの正体を明るみに出し、従来とは異なる新たな育児観を模索すること。このような試みを、実践的にも理論的にも、より多くの成果へと結実するためには、今後も継続的に研究と対話を重ねていく必要があるだろう。